

平成29年度 水城高等学校自己評価表

目指す 学校像	○学力の向上を図り、グローバル化・多様化する社会に通用できる人材育成を目指す。
	○学業と部活動の両立を目指し、活力ある学校を目指す。
	○各自の個性・能力をさまざまな場で表現できる、コミュニケーション能力の高い人材の育成を目指す。
	○健全な道徳観を有し、友愛の情を育み他人と協調し、社会に貢献できる人材を育成する。

昨年度の成果と課題	本年度の重点目標	重点目標	達成状況
	・授業の質の向上	・タブレット導入初年度としてICT教育並びにアクティブラーニングを充実させ、高大接続・新テストに対応できる学力を身につけさせる。	4
		・各教員が教材研究を十分に行い、研修会に参加するなどして、質の高い授業を展開する。	4
		・授業アンケートの結果を指導に生かし、授業の改善・工夫に努める。	4
<p>・東京大学2名をはじめ、東北大学・大阪大学・名古屋大学などの難関国公立大学、また筑波大学や茨城大学に多数合格するなど、国公立大学・大学校を合わせて151名の合格者を出した。</p>	<p>・きめ細かい進路指導 ・国公立・難関私立大学への多数の合格</p>	・各種講演会や個別面談・LHR等とおして生徒の適性に応じたきめ細かな進路指導を行う。	4
		・模擬試験や定期試験の結果分析をし、日々の学習活動やゼミ活動に反映し学力の増進を図る。	4
<p>・私立大学の合格者は早稲田・慶應義塾大学をはじめ785名となった。</p> <p>・医学科の合格者数は、国公立大学で6名、私立大学で2名であり、近年で最も多い数となった。</p>	<p>・生徒が落ち着いて学習でき、安心して学校生活を送れるような環境を整える努力をする。</p>	・中途退学や転学の防止を目指して努力する。	4
		・通学路での交通安全指導を行い、生徒に交通ルールの順守と公共の場でのマナーを身につけさせる。	4
		・情報化社会を生きる人間としての自覚を持たせ、SNS利用時の注意点など、メディアリテラシーを身につけさせる。	4
		・いじめの早期発見・未然防止に努め、必要に応じ関係機関とも連携して対応する。	4
<p>・今年度は難関国公立大学の合格者数をさらに多く出すこと、また、一人ひとりの希望に合った進路実現を目指す。</p>	・募集広報活動の推進	・本学の教育理念に共鳴する入学者を確保するために、組織的・計画的に広報活動をする。	4
<p>・部活動の一層の活性化を図り、文武両道を目指す。</p>	<p>・特別活動の活性化</p>	・学業に励むだけでなく、部活動など課外活動に多くの生徒が参加し、充実した高校生活を送れるよう支援する。	<p>・陸上競技部・空手道部・アーチェリー部・弓道部・水泳部が全国大会に出場した。</p> <p>・男子駅伝部は9年連続の全国高校駅伝大会に出場し、過去最高10位の成績を収めた。</p> <p>・多くの部活動が活発に活動し、地区大会・県大会での入賞や関東大会出場を果たすなどの実績を上げた。</p> <p>・通常の清掃活動に加えて、主に運動部員による校内外の美化活動が行われていた。</p>
		・清掃など奉仕活動を通して公共心を養うと共に、環境問題を考えるきっかけを与える。	<p>・生徒会は、水戸地区大会の他行の生徒会と連携して懇談会やマナーアップ活動を行い、活動の幅を広げた。</p> <p>・図書委員会が県内私学の幹事校として研修会を行い発表を行うなど、委員会活動が活性化している。</p>
		・生徒会活動や委員会活動を生徒が自主的に運営できるように働きかける。	

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

1. 教科

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	総合評価	次年度への課題
国語	・コースと連携し、生徒の基礎学力の向上を図る。	・コースの独自性、特色を生かし朝自習やゼミ学習の機会と連携し、授業時間だけではなく日常的な学習活動の時間を確保することにより、国語に親しみ、社会生活を送る上で十分な国語能力を身に付けさせる。	4	4	コースの実情に合わせ、趣向を凝らしバラエティに富んだ取り組みが展開できたが、SNSの普及による弊害と言える「基本的国語能力の未熟さ」を改めて実感した。次年度も継続して十分に検討された良質なアプローチを模索したい。
	・生徒の家庭学習習慣を確立する。	・授業の中で予習復習及び教科書教材プラスアルファの課題への取り組みの重要性と効果を継続して説き、適切な分量とタイミング及び素材による課題を提供し、国語に対する家庭学習を中心とした自主学習習慣を定着させる。	4		教材の精選、提供のタイミングという点においては大胆な改革を実行できた。しかしながら自主学習習慣の定着はまだ不十分と言わざるを得ない。教員が工夫を凝らした教材を提供したり、生徒個々が利用できるベネッセのWebサービスの活用をより促す等、熱意を持った働きかけを引き続き行いたい。
	・生徒に言語活動を通じた情報処理能力を養わせる。	・授業への関わりの中で多くの文章や問題に触れ、読解についてはもとより、特に自身の意見を述べる際に口頭や記述における表現を通じ、またICT環境も弾力的に活用しつつ、その向上を図る。	4		ICT環境の活用は浸透してきており、次年度はより一層発展した効果的な指導が期待できよう。上述の国語能力の未熟さへの対策として、口頭及び記述での表現活動の機会を授業内外でさらに拡充していくことが肝要である。
	・生徒の理解を深めるための授業スキルの向上を図る。	・公開授業、授業見学や教員間の意見交換を活発に行い、教材研究や授業方法を省みることで、生徒の理解のためによりマッチした授業を絶えず模索していく。また新採教員へのフォロー、アドバイスを教科全体で行うことで、双方のスキルアップにつなげる。	4		個々の教員が日々教材研究に力を入れ、効果的な授業方法を模索していた。激動の教育改革のうねりの中、多岐にわたる業務の多忙さに追われ、教科全体としての十分な新採教員へのフォローは為せず終わってしまった点が悔やまれる。次年度への課題である。

地歴 公民	生徒が目標とする大学に合格させるための基礎学力を身に付けさせること。	教員一人ひとりが意識を高め、より効果的な授業を展開するように工夫を重ね、授業力の向上につとめていくと共に、同一科目・学年・コース担当者間の連携を強め、相互に経験を共有する機会を積極的に持つよう努める。	5	4	ICT教材の効果的な利用も含め、生徒の基礎学力向上のために、多くの教員が積極的に効率の良い授業展開を工夫した。さらに、地理や日本史の巡検実施や研修を行う機会(内部だけではなく外部も)を行い、興味関心を引き出す具体的な取り組みを積極的に行った。多くの教科会を通して、同一科目・コース担当者間の連携を深め、授業に対するより効果的な展開を検討することが出来た。この点は今後もさらにめざしていなければならない。
	ICT教育やアクティブラーニング導入に伴い、授業で効果的に使う方法を研鑽し、新しい授業構築を目指すこと。	ICT教材の具体的な活用法やALの実践を行いながら、生徒の基礎学力向上のためどのような使い方が最も効果的かを、教科全体で検討する。その際に、多くの教員が校内や校外の研修会への参加を通して、研修を重ねていくようつとめていく。	4		他教科に比べ、地歴科では多くの教員が積極的にICT教材の利用やアクティブラーニングに取り組んでいる。各教員の取り組みを校内研修会で報告し合ったが、毎年校内研修を行い、お互いのスキルをレベルアップさせていくと同時に、意見交換を通して、お互いの積極的な取り組みを紹介し合いながら、それぞれの授業にいかすべく、情報交換をこまめに行っていた。
	主権者教育の一環として、社会全体に対する興味・関心を喚起する授業内容を生徒に提供すること。	現代社会や公民演習などの公民科の科目はもちろんのこと、その他の科目においても、新聞などを利用し、授業内容と社会とのつながりを意識させられる工夫をすること。	3		生徒自身が中立的立場に立てるよう配慮しながら、主体的な政治参加を促すための具体的な方策は、まもなく模索している所である。普段の授業内容で社会とのつながりを意識させるよう授業の中で努めるのは勿論だが、テーマに関わる外部講師を積極的に招き、社会とのつながり・結びつきを意識させる積極的な取り組みを進めていきたい。
	小論文・大学入試後の学習、さらに人格の形成に不可欠な教養を身に付けるための一助となる内容を生徒に提供すること。	公民科目やA科目など入試科目との関連が薄い科目についても、高い習得目標をもって授業を行う。	4		目標をもって授業を行っているが、十分に生徒にその趣旨を伝えきれていない部分があり、今後も意識を高く持ち取り組んでいきたい。

数学	生徒の基礎学力に有効な手段を考え、学力向上を図る。	参考書・問題集を活用し、左図多くの問題を解かせ、基礎学力の向上に努める。また、模擬試験にも対応できるように、生徒の学力層別に目標設定を行い、課題に取り組みさせる。小テストを定期的に行い生徒の学習の定着度を確認する。	4	4	生徒の学力層別の課題を出していくことがうまくできていない。ファイル配布システムを使いこなせるようになっていかなければいけない。基礎学力の向上という点に関しては、小テストなどを定期的に行い確認していくことが出来たと考えている。
	自主的な学習態度を身につけさせ、家庭学習を定着させる。	宿題等を定期的に出し、回収・チェックを確実にし、未提出者やできない生徒は放課後等を利用して指導する。模擬試験・定期試験の見直しをさせ、次回の目標を立てさせることから、各自が行う学習内容を確認させる。	5		宿題等を定期的に出し、その後の指導等も入念と考えている。今までは個人の定期試験や模擬試験の見直しをさせていたが、今後の入試に対応させるため、これからは、他の生徒の解答の良いところ・悪いところを生徒たちに考えさせていく指導が必要になってくると考えている。
	ファイル配布システムを活用し、学力差に応じた指導を実践する。	ファイル配布システムを利用して、学力差に応じた課題を生徒に課していく。また、より良い授業実践のために、指導方法の校内研修を行っていく。	4		個人的なスキルの差があり全員が十分な活用が出来ているとは言えないが、教科内でも十分に研修を行い、スキルアップに努めることはできた。
	ALを意識した授業展開の工夫を行う。	確認問題の課題だけでなく、授業内容を言葉による説明などで表現をさせる課題も課し、授業内容の理解をさせていく。	3		ALを意識した授業展開が今までほとんどできていなかったため、各教員が手探りで様々な試みを行っている状況である。今後、数学の授業におけるALの行い方を研修会を開きながら確立していきたい。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

理科	・自然科学に対する関心を高める。	・教科書だけでなく、時事問題との関連付けを行い、生徒の興味・関心を喚起する。	4	5	自然科学、産業界のニュース等に教師が関心を持ち、学習内容と関連付けて話を出来るよう工夫していく。
		・観察や実験を積極的に取り入れ、イメージを捉えやすくし、探究心も養う。	4		実験室の利用頻度を増やし、必要に応じICTを利用していく。
	・基礎学力の定着を図る。	・教科書内容を理解・記憶させ、小テストや定期試験を用いてその定着を図る。	5		ICTやALが有効な場面でそれらを利用し、基礎学力を効果的に定着させる。
		・模擬試験や入試問題の演習を通じて、応用力を養う。	5		模擬試験の結果に囚われ短絡的な演習を行うことなく、実際の入試での得点力を伸ばすように演習問題を精査していく。

保健 体育	生涯を通してスポーツに親しめる姿勢を養う。	・スポーツ活動を通し、活動した時の爽快感や出来た時の達成感を感じられる授業展開する。 ・様々なスポーツ種目を授業で取り入れ、自分の好きなスポーツを見つけられるようにする。	5	4	引き続き、スポーツを楽しむ習慣を養うとともに、自ら体力向上・健康の保持増進に努める姿勢を身につけさせたい。
	保健の授業で学んだ知識を自分の生活の中で役立て、更に実践出来るようにする。	・生活の中の話題を授業に取り入れ、実生活と結び付けて知識の理解を得られるようにする。 ・ITを利用し、興味関心を得られるような授業を工夫する。	4		現在、将来の身近な話題を取り上げ、身の周りの事象に対処できる知識を身につけさせたい。また、タブレットを有効活用して取り扱う教材の興味関心を深めさせたい。
	用具や施設を大切に使う態度を養う。	・授業で使用する道具や施設の準備や片づけをきちんとできるようにし、公共心を培うよう指導する。	4		公共物を大切にする姿勢をさらに養わせたい。

英語	・「聞く」「話す」「読む」「書く」を総合的かつ統一的に指導することで、実践的なコミュニケーション能力を育成するだけでなく、入試に対応できる英語力を身につける。	・聞く力：初期段階においてできるだけ多くの英語の音声聞かせ、文字からではなく音声からの英語習得を図る。	4	4	本年度センター試験のリスニングが難化しており、今後も高いレベルが求められることが予想される。できるだけ多く英語の音声聞かせ、ディクテーションなどを行い、能力を伸ばしたい。
		・話す力：正しい発音での英文暗唱と、授業中に英語を発する機会を増やすことに力を入れ、英語での意見の発表や討論ができるように指導する。	4		英語が実技教科であるという意識のもと、次年度は意見の発表だけでなく、e-ラーニング系のコンテンツを準備するなどして、話す力の向上に力をいれていきたい。
		・読む力と書く力：英文の直読・直解が出来る。また、まとまりのある段落や文章が書けるように指導する。	4		読む力に関しては、十分に時間をとり指導できている。書く力に関しても一定の成果を上げているが、低学年から時間を設けるなど、授業内容を工夫していきたい。
	・学年と教科が連携し英語学習の基盤を作り、学校全体で生徒が積極的に英語学習に取り組める環境を作る。	・語彙の習得：学年、コースと協力し、朝学習として単語テストを行うなどの活動をする。それを定期試験と連動させて、一層の定着を図る。	5		学年の協力を得て活発に行われた。生徒の学習習慣構築の土台ともなっている。次年度は音読する時間を増やし、発音等も含めて現状よりもっと指導していきたい。
		・文法の習得：授業以外にゼミを各コースで開講し、基本から応用レベルまで向上させていく。反復練習を中心に行い定着を図る。	4		例年通り一定の成果を上げているが、かなりの時間を必要としている。より短時間での定着ができれば、その分他の技能を伸ばせるため、次年度は指導法に変化を加えていきたい。
	・多様化する入試科目としての英語を研究する。それにしっかりと対応できるようにするために教員の更なる英語指導力の向上を図る。特にICTを使った教授法について研究する。	・動機付け：昨年に引き続き、授業の内容や教材を工夫し、生徒の動機付けを行う。また、英語検定などの資格取得を目指すことで学習意欲を高める。特に準1級合格者数を増やす。	5		英語検定の受験者数の増大、1年次での2級合格数、2年次での準1級合格数などを見て、英語学習に対する学習意欲の向上と良好な環境を作ることはできていると言える。
		・実践力の強化：大学入試の出題傾向や出題形式を教員が分析した上で、教員自らが生徒に合った教材を作成し、入試に対応できる力を付けさせる。	5		本年度、近年の大学入試問題や外部検定試験の問題の考察を行った。引き続き考察を行っていきつつ、次年度は特に外部検定試験での実績をより良くしていきたい。
		・指導力の強化：ICTを使った教授法に関して校内で研修会を行ったり、教員各自が外部の研修会などに積極的に参加したりして、指導法のより一層の改善を行っていく。	4		ICTを使った教授法に積極的に取り組むことができた。実践例を共有し議論したり、外部の研修会に参加するなど自己研鑽を積むことができた。引き続き指導力向上を目指していく。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

芸術	生涯を通じて芸術を愛好する心情を育てる。	表現する喜びや達成感を味わえるような授業を展開する。	4	4	自己の感性の様々な表現方法を知りながら、多様な方法を体験しながら感性や成熟を目指して取り組む。
	感性を高め、創造的な表現能力を伸ばす。	主題を明確にし、素材の特性を生かした表現が出来るように工夫させる。	4		情報機器を活用しながら、新たな表現方法や発表方法を見つける。
	鑑賞の能力を伸ばす。	鑑賞を通して、芸術表現の特質や様式、表現方法などを理解し、その良さを味わえるようにする。	4		西洋の文化や舞台の歴史的背景についての理解を深めながら、表現力の豊かさに触れる。

家庭	自立することを目標に、さらに人とともに生きることを身につける。	家族・こども・高齢者など共生社会について理解できるようにする。	4	4	人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得する。
	人との協力の中で豊かな生活と環境を身につける。	衣食住、経済生活および環境について理解し、実践できるようにする。	4		学習した知識や技術を活用し、家庭や地域の生活課題を主体的に解決する態度を育成する。
	実習を通して実践力を身につける。	被服実習を通して基礎を定着させ、日々の生活に生かせるようにする。	4		家族や社会との共生を目指し、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。
		調理実習を通して実践を身につけ、日々の生活に生かせるようにする。	4		様々な実習を通して実践力を身につけ、日々の生活に生かせるようにする。

情報	アプリケーションソフトの操作方法を習得する。	林間学校や修学旅行に関するレポート作成を通してワープロソフトの操作をできるようにする。	4	4	基本的な操作については身につけているが、見やすい文書デザインに編集する技能も習得させたい。
		エクセルの関数を使って計算式を立てたり、グラフを作成したりして表計算ソフトの操作をできるようにする。	4		生徒自らが試行錯誤しながら計算式を立て、グラフを作成する技能を習得させたい。
		パワーポイントのアニメーションなどを駆使してプレゼンテーションソフトの操作をできるようにする。	4		アニメーションなどを使って簡潔な文章で相手に伝わりやすいスライドを作成する技能を習得させたい。
	情報発信者としての態度、姿勢を身につける。	発表会を通して正しい情報を発信する能力を身につける。	3		社会問題を題材にしたプレゼンテーションを行う際に、社会科と連携して教科横断型の授業をすることにより、より一層理解を深めてプレゼンテーションの準備・発表できるようにさせたい。
	ネットワークを利用する上でのマナーや態度を身につける。	インターネットを利用して、正しい情報収集能力を身につける。	3		インターネット上の情報がすべて正しいとは限らない。正しいことと誤っていることの区別ができるような能力を身につけさせたい。
		レポートに引用先を明記したり、著作権に配慮して要約したりできるようにする。	3		著作権に配慮して、レポートの引用の仕方について徹底させたい。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

2. 校務分掌

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	総合評価	次年度への課題
教務部	教員の授業力向上に努める。	関係各所と連携し、タブレット端末を利用した授業やアクティブラーニングを実施するための研修が昨年度より多く持てるように努める。	4	4	次年度からは、総合学習に関連した知識もより一層必要とされる。その為の研修の機会があること、つづることが課題だと思う。
	学校備品の丁寧な扱い方を徹底する	コピー機・印刷機・製本機等の無理な扱いをなくし、昨年度より機械トラブルを減らす。	4		2号館にも製本機が入り、各職員室の事務機器が充実した。仕事しやすい環境が整ってきたので、忙しい時にも丁寧な事務機器の扱いを心がけて欲しい。
	高等学校教育研究会図書部会生徒研修会によって、図書委員の活動をより活発にする。	理事校として、水戸地区生徒図書委員研修会(9月)、私学生徒図書研修会(11月)を開催し、日々の図書委員の活動に役立つ充実した研修会にする。	5		理事校としての経験を、次年度の図書委員会活動の糧にして、より図書委員会を活発にし、他の委員会活動の見本となるように努力したい。

生徒指導部	規範意識を持って自主的に行動できる生徒を育てる。	交通ルールやマナーについては、公共の場での責任ある行動について考えるよい契機としてとらえる。またソーシャルメディアに対するモラル向上にも積極的に取り組む。	3	4	<p>駅南中央通りの通学状況(徒歩通学者・自転車通学者)は全体的には良くなりつつある。ただし、少数ではあるが、「歩きスマホ」や「自転車乗車時のイヤホン使用」等の違反も見られる。特に、自転車事故は昨年同様20数件発生しており、交通安全指導を徹底していきたい。なりすまし被害を含むSNSトラブルも発生していることから、情報安全教育も継続して指導していきたい。</p> <p>生徒会だけではなく、各種委員会等が、自主的・主体的に活動できるような環境を提供し、その活動をサポートしていく体制を整えていきたい。</p> <p>頭髪や服装の指導においては、教員の共通理解の下で足並みの揃った指導ができていられると思われる。年3回の「いじめ調査」により、いじめを早期に発見し、対応することができるようになってきている。いじめだけではなく、様々な問題行動を未然に防止できるようにきめ細かい指導を徹底していきたい。</p>
	生徒会活動、各種委員会活動を活性化させ、生徒達が自主的に取り組む機会を増やし、部活動を含めた学校生活の充実を図る。	生徒会、各種委員会活動等の自主的な活動を活性化させる。	3		
	基本的生活習慣を確立させ、充実した学校生活を送る基礎を作る。	・教職員の共通理解のもと、足並みの揃ったきめ細かい生活指導体制を確立する。 ・いじめ等の問題には迅速に対応する。 ・問題行動の未然防止に努める。	4		

学習指導部	生徒の学力向上への支援として課外授業の運営をする。	講座の内容だけでなく時間を変えるなど、学年・コースに応じた課外授業の実施をする。	4	4	長期休業を含め、本校教員による課外授業を運営していく。予備校による講習会をやめ、e-learningの活用を広げていく。
	先進的な学習指導への取り組みを推進する。	授業でのICTの効果的活用のため、外部専門家の協力も取り入れていく。端末を利用した生徒の自主的な学習支援システムの導入をする。	4		学習指導の長期計画を示し、学年コースそれぞれの目標にあった形で、教育改革で求められる学力の養成を推進していく。生徒に教材を紹介するなど具体的・実践的な学習指導を行っていく。
	教員研修の充実をはかる。	教育関係者や大学教員を招いての講演会や他校の授業見学などの研修会を行う。	5		他校訪問、県教育関係者・IT企業による講演などこれまでの研修で学んだことを実践に移していく。

進路指導部	3学年生徒の進路決定のための学年および生徒への支援	大学からの情報を仲介し、生徒・教員に発信する。進路指導室の利用を促し、生徒の進路研究・入試対策を支援する。	4	4	大学入学共通テストの該当学年が入学し、次年度以降、各大学の入試制度などの変更点が多く告知される状況を鑑み、進路通信を充実させ、迅速・丁寧な情報伝達を図りたい。
	推薦・AO・個別試験対策の充実	推薦・AO・個別試験についての研究の先頭に立ち、教科・学年と連携しながら、徹底した指導による合格率の上昇を目指す。	4		表面的な合格数や合格率に踊らされることなく、「学力の3要素」を身に付けた生徒を育てることを最大の目標とする進路指導の実現を目指し、校内の共通理解を図りたい。
	入試改革についての情報収集および整理	2020年度入試改革についての情報を収集・整理し、校内での早期対応を促す。	4		今年度、ある程度の成果を上げたが、情報発信の遅れが生じた部分がある。迅速な対応を心がけたい。教員だけでなく、何よりも生徒の目線に立って、情報の収集・整理、対応への指導を充実させたい。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

保健環境部	・社会貢献への意識向上を深めさせる。	・ペットボトルのキャップ回収を行い、NPO法人世界の子どもにワクチンを日本委員会へ寄与する。 ・3年生による赤十字血液センターへの協力をする。	5	4	・今年度のエコキャブ推進協会への実績は190.490個(443.00kg)、本校としては多い方だが、もう少し増やしたい。 ・3年生による献血は、189名の申し込みがあり、その日の体調により実際に採取出来た数が155名であった。内400mlが71名と全体の生徒数にもよるが、増加傾向にある。
	・衛生活動、美化活動の充実。	・各委員会による校内施設の点検、不備報告の充実化。	3		・年間を通してみた場合、後半の美化委員会の活動が上手く行っていなかった。反省を踏まえ来年度に繋げていきたい。
	・合理的配慮に基づく支援体制の充実	・教員の支援力向上のための研修会の実施。 ・各種調査による関係者間での情報共有と支援の実施。	4		・次年度は、教員の支援力向上のための研修会を複数回実施したい。 ・関係者間での情報共有と支援をより一層充実させると共に、各教員に対し、各種調査の効果的な利用を促す努力をしたい。

渉外部	魅力的なPTA活動を目指す	総会や常任委員会、各種委員会の出席率を高め、活発な意見交換を促す。視察研修、講演会等のPTA行事への参加者を増やす。システム(お知らせメール・資料アーカイブ等)を活用し、会員との双方向の意見交換を可能にする。	4	4	インターネット環境が整備され、保護者への諸連絡や案内・アンケート調査等が簡易かつスムーズになり、保護者もこのシステムに慣れてきた。今後は学校からの発信だけではなく、保護者からのより多くの意見の集約に取り組みたい。
	機能的な組織作りを目指す	PTA会員の現状に則した機能的で効率的な組織作りを目指す。限られた予算を有効かつ公平に多くの会員に還元できる企画・方法を考える。	4		来年度からPTA支部組織が廃止になり、学年委員を中心としたPTA活動がスタートすることが決定した。また、これに伴うPTA会則の改定も順調に進んでいる。今年度は、視察研修・講演会に重点を置いて取り組み、概ね達成できた。

生徒募集部	昨年度以上の志願者を確保する	昨年度から取り組んでいる5教科記述式一般入試(再)を広くアナウンスし、志願者増へつなげる	4	4	コースや奨学生の名称等を見直す等、より受験しやすい制度を構築する。
	定員を満たす入学生を確保する	単願者合格者を増やす	3		10月の塾説明会をさらに充実させる。
	小学生に本校の魅力をアピールする	小学生対象説明会を成功させる	3		小学生対象説明会のアナウンス範囲を水戸市内だけでなくその周辺市町村にまで広げる

システム管理部	すごいシステムを当たり前を提供する	国内屈指の自校構築型校務システム群・AL&ICT環境を、安定的に稼働させつつ、よりよくなるような改善を常に行っていく。	5	5	高負荷環境でも十分な速度で稼働できるように様々な部分をシステム改修した。次年度生徒全員タブレットの2期生が入学してきても、十分に耐えうる環境を維持していく。また、引き続き、意欲向上や利便性向上のための有用なシステムを提案・構築していく。
		システム管理部メンバー増員に伴う、スタッフの業務分担の適正化と、システム管理者に一極集中している権限の分散化を行い、持続可能なシステム部門にしてい。	5		適切なシステム改修により、権限の分散化は完成した。
		生徒・教員ともにAL&ICT環境をより有効に活用できるようにするための、方策や研修会を継続して行い、「ポートフォリオ」「高大連携」「大学入試改革」のつながりを意識させる。	5		システム管理者が突っ走る形で実践してきたこの項目についても、順次、学習指導部や進路指導部が主体となって行うようになってきており、一定の役割は果たせた。大学入試改革に伴う、新しい動きの中でシステムに関する部分については引き続き最新の情報を提供していく。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

3. 学年

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	総合評価	次年度への課題
1学年	愛校心の涵養と基本的な生活習慣の確立。この2点は、生徒が充実した学校生活を送れるようになるための基本である。	全校集会等での校歌斉唱の際、従来のようにCDを流さず、無伴奏とする。大きな声を出して校歌を歌う習慣をつける。朝自習を計画的に実施することで、不要な遅刻をなくし、安定した学校生活を送れるようにする。	5	5	全校集会での指導の効果もあり、ほぼ全員の生徒が校歌を堂々と歌えるようになっていた。教員側が率先して歌う姿勢を生徒に示すことが何よりも大切である。朝自習には強制力がないため、全生徒の参加を徹底することはできなかったが、基本的な生活習慣を身に付けさせるという点においては、概ね成功であった。
	2年次以降に向けて、生徒一人ひとりが適切な文理選択をできるようにする。	学部学科解説本の配布、職業解説のHP等の紹介を通して、生徒が進路について自ら考えることができるようにする。さらに、進路適性検査、キャリアガイダンス、教育課程説明会、進路講演会等を実施し、生徒の進路選択を支援する。	5		各種行事やLHRでの担任指導等により、文理選択に必要な情報は十分に提供することができた。キャリアガイダンス(生徒対象の職業紹介)は招聘講師の当たり外れの差が大きかったが、業者(受験情報会社)の介在を前提とすれば、ある程度はやむを得ない。
	生徒が安心して学校生活を送れる環境の整備。	担任との面談を定期的に行い、必要に応じて副担任、学年主任、教科担当との面談も実施することで、生徒が個別に抱える悩みや相談事について柔軟に対応できるようにする。保健室や生徒支援委員会との連携も強化する。	4		担任教諭と生徒との二者面談を年間を通して複数回実施したことで、個別の悩みや相談事には出来る限り対応することができた。しかし、生徒も教員も多忙な中、保護者や生徒の声に十分に耳を傾けることができていたとは言え切れず、生徒同士、教員と保護者の間で関係がこじれてしまうケースが散見された。

2学年	各自の進路希望に応じた入試に対応する学力を養成する。将来にわたって自ら課題を見つけて学ぶことの出来る「学びの態度」の育成を目指す。	毎日の授業を大切にし、学習習慣の定着を図る。朝自習やゼミ学習など様々な場面で学習の機会を提供し、積極的に参加するように働きかけることで学習時間を確保させる。小論文の指導を通じて、「論理的思考力・表現力」を養成する。	4	4	朝自習や放課後のゼミ学習を通じて、生徒たちに継続的に学習する機会をを与えることができた。多くのクラスで1年間朝自習への参加を維持することができたが、中だるみのためか、一部の生徒の朝自習への取り組みに甘さが見られたことは残念であった。新年度は進路を決定する大切な1年間となる。生徒たちには、進路に対するより具体的な目標を設定させ、ひとりひとりの希望進路が実現できるように、丁寧に支援していきたい。
	自らの進路について主体的に考えさせ、3年次に向けてより具体的な進路目標の設定が出来るように指導する。	大学出張講義(9月)や進路講演会(10月)などの進路関係行事を通じて、生徒・保護者が進路について具体的に考える機会をつくる。夏休みを中心に、大学等のオープンキャンパスに積極的に参加するよう働きかける。志望理由書の作成等の小論文指導を通じて、将来の進路について考える時間を作らせる。	4		大学出張講義や進路講演会などの進路関係行事を無事に実施することができた。いずれの行事も、ほぼ例年通りの形で行ったが、特に大学出張講義については、実施の方法や時期、内容、保護者との情報共有のあり方などをもう一度見直す時期に来ていると考える。小論文の指導に関しては、外部講師を招いてのガイダンスを2回実施し、基本的な指導は十分に行えたと考えている。
	集団生活を送る上での規範意識やコミュニケーション能力を養い、将来、市民社会の一員として、適切に行動出来るよう指導する。	日々の学校生活や、クラスマッチ・修学旅行などの各種行事を通じ、生徒や教員がお互いに協力し合う中で、他者との適切な関わり方を学ばせる。生徒指導部の方針に基づき、学年全体として校則などのルールを守らせるように指導する。	4		クラスマッチ・修学旅行などの各種行事を、無事に実施することができた。特に修学旅行については、700名を越える集団が、各担任の指導のもと、生徒たちひとりひとりの自覚的な行動のおかげで、大きなトラブルもなく終了することができた。しかし、1年間の学校生活を振り返ると、一部の生徒ではあるが生徒指導部の指導を受けた生徒も出てしまったことは残念である。新年度は最上級生として、1・2年生の模範となるように、継続的な指導を行ってきたい。

3学年	自身の進路について、主体的に目標を設定させ、具体的な進路目標を実現させる。	二者面談や三者面談を随時実施し、保護者や生徒の希望を把握し、適切な進路指導を行う。進路講演会や進路ガイダンス、学級懇談等を通して、保護者や生徒に情報を提供し、進路目標設定のサポートを行う。	4	5	担任は二者面談や三者面談に時間をかけ、生徒の希望に応じた進路選択を援助することができた。3学年担当が大学入試関係の情報交換会に参加し、その情報を生徒に還元している。進路講演会は、推薦入試向け・一般入試向けの2回実施し、保護者に対して積極的な参加を呼びかけた。三者面談は、希望があればいつでも対応することとし、保護者との共通理解をこころがけた。今までと異なり、大学入試が変化してきており、情報収集に力を入れた。
	進路の希望に応じた学力を確実に身につけさせると同時に、将来にわたって役立つ学力の養成を目指す。	早朝学習やゼミ学習は、より入試に直結させ、積極的に受講させる。定期試験や模擬試験を基に二者面談を実施し、生徒に応じた学習方法について指導する。また、学年全体として、最後まであきらめない雰囲気づくりを行う。	5		早朝学習は、生徒の状況に応じて、センター試験対策など、今まで以上に入試に直結したものとした。生徒との二者面談を繰り返し、推薦・AO・一般・その他 個に応じた受験方法や学習方法を提案し、受験に導いた。センター試験やその他の受験に最後まで挑戦させ、決めたことをやり抜く態度を身につけさせた。生徒たちは、受験を通してよい経験をすることができた。
	社会の一員として道徳心を持った行動ができるように指導する。	学校行事やクラス内での活動を通して、生徒と教員が時間を共有し、道徳心をもって他者とかかわることが必要であることを、継続して指導する。また、高校卒業の意義を生徒に自覚させる。	5		例年同様、3学年として大きな行事は少なかった。しかし、クラスマッチや野球の全校応援などに参加する機会があり、他者とのかわり切りの大切さを体験させることができた。また、全校集会や卒業式を通して、高校卒業の意義を理解させ、新しい生活の心構えをさせることができた。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない